

# 信心銘

「一」 至道

至道無難しいどう

唯だ揀択を嫌うけんじゃく

但だ愛憎莫ければた

洞然として明白なりとうねん めいぱく

毫釐も差有ればこうり

天地懸かに隔たるはる

現前せんと欲得すればまへ

順逆を存すること莫れ

「二」 違順

違順相い争う

是れを心病と為す

玄旨げんしを識しらざれば

徒らに念静ねんじやうに勞す

円まじかなること太虚たじやうに同じ

欠かくること無く餘あまること無し

良まじかに取捨しよに由る

所以ゆゑに不如ふじやうなり

有縁うゑんを逐おうこと莫なれ

空忍くうにんに住すること勿なれ

一へい種かい平懷へいなれば

泯然みんねんとして自おのから尽すく

心動いて止しに帰すれば

止 更に弥動こまごまず

唯だ両辺に滞る

寧なんぞ一種を知らんや

一種通ぜざれば

両処に功を失う

有を遣やれば有を没もつし

空に従えば空そむに背く

多言多慮

転うたた相応せず

絶言絶慮

処として通ぜざる無し

根しに帰すれば旨を得

照に随えば宗を失す

須臾しゅんぷも返照すれば

前空くわくうに勝却す

前空の轉變は

皆な妄見まがけんに由る

真を求むることを用いず

唯ただだ須すらく見を息いきむべし

「三」 二見

二見にけんに住せず

謹こつしんで追尋しゆんすること莫なれ

才わすかには是非しはいあれば

紛然として心を失す

二は一に由つて有り

一も亦た守ること莫れ

一心生ぜざれば

万法咎とが無し

咎無ければ法無し

生ぜざれば心ならず

能のうは境に随つて滅し

境は能を逐おつて沈む

境は能に由つて境たり

能は境によつて能たり

両段を知らんと欲せば

元もと是れ一空

一 空は両に同じ

齊ひとしく万象を含む

精せい麤そを見ず

寧なんぞ偏党有らんや

「四」 小見

大道体ひろ寛く

易無く難無し

小見は狐こ疑ぎす

転うたた急うたなれば転うたた遅し

之を執すれば度を失し

必ず邪路に入る

之を放てば自然じねんにして

体こじゅうに去住無し

性まかに任せて道に合し

逍遥として脳を絶す

懸念けねんすれば真そむに乖そむき

昏沈こんちんして不好こんちんなり

不好しんなれば神しんを勞しんす

何ぞ疎親そしんを用いん

一乗を取らんと欲せば

六塵にくを悪にくむこと勿にくれ

六塵にくを悪にくまざれば

還しようつて正覚しようがくに同じ

智者は無為なり

愚人は自縛す

法に異法無し

妄りに自ら愛着す

心を將つて心を用う

豈に大錯に非ずや

迷えば寂乱を生じ

悟れば好悪無し

一切の二辺は

浪りに自ら斟酌す

夢幻虚華

何ぞ把捉を勞せん

得失是非

一時に放却す

「五」 一如

眼まなこ 若し睡らざれば

諸夢 自から除く

心しん 若し異ならざれば

万法いちにち一如なり

一如体玄なれば

兀爾こつじとして縁を忘す

万法ひと齊しく觀ずれば

歸復自然じねんなり

その所以ゆえんを泯みんじて

方比すべからく

動を止むれば動無く

止を動ずれば止無し

両ふたつながら既に成ならずんば

一 何しかぞ爾しかること有あらん

究竟窮極くきやうごくごく

軌則きそくを存ぞんせず

心の平等かなに契あえば

所作しよ俱ぐに息せむ

狐疑こぎ 尽つく浄じやうきて

正信せうしん調直てうぢくなり

一切留りゆうめず

記憶きこくすべき無し

虚明こめい自じから照てうして

心力を勞せず

非思量の処

識情測り難し

はか

「六」 真如

真如法界は

他無く自無し

急に相應せんと要せば

唯だ不二と言う

不二なれば皆同じ

包容せずといふこと無し

十方の智者

皆なこの宗に入る

宗は促延あらに非ず

一念万年

在と不在と無く

十方も目前

極小は大に同じ

境界は忘絶す

極大は小に同じ

辺表を見ず

有は即ち是れ無

無は即ち是れ有

若し此かくの如くならざれば

必ず守もちることを須もちいず

一は即ち一切

一切は即ち一

但た能よく是かくの如ごとくならば

何なんぞ不ふ畢ひつを慮おもんばからん

信心不二

言語ごんごの道みちは断ことえ

去こ来らい今こんに非あらず